富岡隆夫日記　「土生重次」のこと

富岡訓子

三国丘高校卒業写真

1955年3月

隅田川遊覧

前列：左より　ガールフレンド、土生重次

後列：富岡隆夫

富岡訓子2015『コスモスや隆夫をよろしく天の父母』156頁

発行：富岡訓子

「富岡隆夫日記（学生時代）」

■1959年12月11日

※土生とこへゆけど、彼未だ帰阪していない。小父さん、小母さんからいろいろ世間話や愚痴や相談をもちかけられて結局8時ごろから11時半迄居た。

とくに土生の卒業、就職問題について。ちょっと僕からも説教して欲しい由――。「こうもり」のオルロフスキー公爵ではないが〝十人十色〟ということばはぼくもすきだから、そんなことついぞ考えたこともなかった。人さまざまに生きる。生きぬくことの貴さは些少な価値判断で傷つくものではないとおもう。僕以外の人に僕自身の倫理をおしつけるのはいやだ――というより侮蔑になる。そして僕はむしろ恐ろしいと思う。自信がない。僕自身が試運転中なのだから。

同時にぼくは何人をも羨まない。個々の性格とか、その他の面ではあるが人間全体をうらやむ対手にはまだお目にかからず、おそらく一生そんなことはなかろう。

※土生重次　扉俳句会の創立者である土生重次は、昭和10年に大阪堺市に生まれ、中学時代に叔父に俳句の手ほどきを受ける。学生時代はバンド活動などで俳句と遠ざかるが、昭和45年頃俳句再開、49年「蘭」（野沢節子主宰）入会、同編集長などを経て生句会指導（句会報刊行）を土台に、平成3年「扉」創刊準備号を経て、5月扉創刊号（6月号）発行により俳句結社「扉」主宰となる。上場企業役員を務めながら主宰として結社の育成に務めるも、定年後間もなく健康を損ない、平成11年末で結社主宰を辞し平成13年に逝去。句集『歴巡』『扉』『素足』『刻』

富岡隆夫2010『こりゃあ閑話』104頁

道階倶楽部　本渡諒一

扉創刊主宰 土生 重次レクイエム

富岡隆夫2005俳誌『扉』7月号掲載

センセイよ、土生よ、お前て結構、天才やったんやな。高校では全然気ぃつけへんかった。そら、ワイら読めへんようなジャン・ジュネとか、ケッセルとか、読んでたのは知ってるけど、一生賭けてるのが、俳句とは知らなんだ。高校ではようさぼって、体育館で卓球したよな。えらいカッコつけて、まあよく言えば蝶のごとく舞って、えげつないカット・ボールを打ち返してたが、見方によっては「蛾のような」と形容してたよかった。お宅へもよう行った。怖いお父ちゃんと優しいお母ちゃんやったな。

親友に山口富造というアルゼンチン・タンゴの通で、後に税理士になる男がおったが、これはワイが俳句始めたころに、スキルス性のガンで亡くなった。あのとき、もうお前は発病して葬式に出られへんかったが、ものすごく悲しかったやろな。〈コスモスや集会場のタンゴ葬〉ちゅうのは、思い切り初期のワイの作品や。あんまり進歩してない？言わんといてくれ。

お前が身動きとれんようになって、ほんならちょっと雑誌づくりだけ、手伝うたろか、と病床で言うたら、お前、へへへと笑うたな。なんか「ついに軍門に下ったか」ちゅう感じやった。参った、参った。俳句てこんなにむつかしいもんや、とは思わなんだ。とくに季語ちゅうのが難物や。ときには夢に出てきて、教えてくれぇ。

もう四年たったな。扉もいろいろあったようやけど、やっぱりお前の自信に溢れた快活さが、貫く棒のごときものになってる。それ、なくしたら扉も終わりや。しゃあない。一誌一代で終わり、ではないことを、そっちから見とってくれや。